特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会（第 39 回）

議事録

日　時　令和 7 年 1 月 28 日（火）15:00～16:30

場　所　西の丸会議室

出席者　構成員

丸山　　宏　　名城大学名誉教授　　座長
仲　　隆裕　　京都芸術大学教授　　副座長
高橋知奈津　　奈良文化財研究所文化遺産部遺跡研究室室長

オブザーバー

平澤　　毅　　文化庁文化財第二課主任文化財調査官
山内　良祐　　愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室　技師

事務局

観光文化交流局名古屋城総合事務所
教育委員会生涯学習部文化財保護課

議　題　・二之丸庭園の修復整備について

配布資料　特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会（第 39 回）資料

事務局	1　開会 2　あいさつ 　本日は、ご多用の中、第 39 回特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議庭園部会にご出席いただき、誠にありがとうございます。開会前に、この寒い中、現地指導いただき、誠にありがとうございました。本日の部会の議事は、二之丸庭園の修復整備について、余芳周辺の整備にあたり景石、石橋、燈籠など復元の方針等について、ご意見をいただきたいと考えています。限られた時間ではありますが、皆様から貴重なご意見をいただきながら進めていきたいと思います。よろしくお願いいたします。 3　構成員、事務局、オブザーバーの紹介 4　今回の議事内容 　資料の確認をいたします。会議次第と、裏面に出席者名簿。2 枚目に座席表。本日の議題の資料 1 として、A3 のものとなっています。 　それでは、議事に移ります。ここからの進行は、丸山座長にお願いします。丸山座長、よろしくお願いいたします。
	5　議事 ・二之丸庭園の修復整備について
丸山座長	それでは、今日の議事、二之丸庭園の修復整備について説明をお願いします。順番にまた、途中までいったら区切っていったらいいと思います。
事務局	資料が 24 ページありますので、まず 1 ページから 13 ページの植栽前までご説明して、そこでご意見を伺いたいと思います。 　1 ページ目は絵図の比較になっています。2 ページは石橋についてです。9 月に行われた前回の部会で、石橋の実寸の模型を設置して検討しました。そのときに、古材という説明をしましたが、前回のワーキングで、新材のほうがいいのではないか、ということでした。今回、新材として計画図を描きました。それが、図 2 - 3 です。側面から見た高さなどは変わっていなくて、厚さが 150、長さも 2600 と変わってはいません。古材を前提として、まん中が少し厚く 24ｃｍとなっていましたが、それが 18ｃｍと少しまっすぐになります。天端の加工については、排水に配慮して 2 分程度のムクリを付けます。石質については、二之丸庭園にふさわしい国産の花崗岩の中から、調達や加工の容易さ等を考えて選択したいと考えています。資料では、庵治石や白石島白石、岡崎産の花崗岩を列記しています。 　3 ページをご覧ください。雪見燈籠 - 1 です。前回の 9 月の部会にて、写真の形で、実寸大のパネルを設置し、お話しました。高さ 1.5mがい

	いのではないかというご意見をいただき、そちらで検討しています。石質については、石橋と同じです。前回のワーキングで仕上げについて宿題をいただいていたと思います。ノミ切りビシャン仕上げと確認できたので、資料に明記しています。 4ページをご覧ください。雪見燈籠‐2です。前回の部会で、雪見燈籠の脚の数が3本なのか、4本なのか、という議論がありました。その中で、御城御庭絵図のほかの燈籠等を勘案し、脚の数について検討しました。例えば、図2‐11の燈籠は一体型の4本脚が描かれています。図2‐14が、今回問題としている燈籠です。前回までの議論では、絵図には3本しか描かれていないので、3本ではないかいと説明していました。しかし、見直してみると、図2‐11の描かれ方、右寄りに2本出ている描かれ方が、非常に図2‐11と似通っていることから、こちらの燈籠についても4本ではないかということで、今回整理を改めています。 5ページには、4本脚にしたときに制作等が変わってきます。左側の写真2‐5のように、これは古材になります。前回までの議論では、下側の脚は3本で加工、制作する説明をしていたと思います。4本脚であれば、写真2‐6の下側の脚のようなものがあり、上の笠、火袋と下の脚を組み合わせることも可能だと考えました。宝珠だけを製作して、その他は古材を組み合わせることが可能なので、いったんこの方針で検討したいと考えています。 6ページは立ち手水鉢です。前回の部会で、GLから高さ900で立ち手水鉢を製作することとしています。ただ、高さが少し変わってきた場合の調整代が必要ではないか、というご意見がありました。その下、GLに埋まるかたちになっていますが調整代を残して、300mm調整代をみて製作することを考えています。 7ページをご覧ください。四角型燈籠です。現場でもご説明し、現場でのご意見は、火袋が縦長なので正方形、280×280に改めたいと思います。また、笠も少し盛り上がっている形になりますので、少し低くして、もう一度検討します。燈籠の位置関係ですが、絵図ではこれよりも少し東側ではないか、という議論がありました。またご意見をいただけたらと思います。 8ページをご覧ください。標柱は、前回の部会で、上面が掘り込みであることで、水鉢状に掘り込むことにしています。また設置の際に余裕代が必要ではないか、というご意見がありました。これも300調整代をみて製作することを考えています。 9ページは枝折戸です。枝折戸に関しては、前回のワーキングから変わっていません。参考の御城御庭絵図の戸面と支柱で、尾二ノ丸御庭之図の支柱位置と高さで、絵図とおりに製作していきます。こちらも、またご意見があればお願いします。 10ページは袖垣になります。袖垣については、10ページ、11ページにあります。余芳の南側の袖垣について、いろいろご意見がありました。まずは、少し大きすぎるのではないかというご意見でした。この点に関して、今は高さが180ｃｍ、6尺程度の模型ですが、これを4尺、120ｃｍ程度にして検討します。長さについても、少し長すぎるので、4尺程度にして検討します。立て方ですが、写真のように立てるとすると、タタキをくり抜いて柱を打つ方法でしか立てられません。どのような立て方で立てるのかについても、ご意見をいただければと思います。 12ページをご覧ください。景石の配置についてです。資料自体が、野

	村先生から前回ご説明のあった範囲の要点を記した資料です。余芳の上段の間から北園池を見た中心軸は、絵図上では、権現山の石橋のところにきています。ここから復元した余芳が、それとは少し違う位置に建っているので、石橋の中心線がきちんと活きるかたちで、余芳の西側の庭を造っていきます。御城御庭絵図よりも尾二ノ丸御庭之図のほうが、最終形として望ましいのではないかというご意見もありました。余芳の東側の御庭については、大きな景石を設置した石庭、陰陽石を配置した景色が造られていたのではないかということで、今回この資料になりました。野村先生のご意見を図面化したものが、13 ページの平面図です。 　一旦説明としては、以上とします。燈籠などについて、ご意見をお願いします。
丸山座長	まだあと植栽の部分もありますが、ご説明されたところについて、確認も含めてご質問、ご意見をお願いします。どこからでも結構です。 　雪見燈籠で、かなり値段が張るので、来年度できないかなと思っていましたが、できそうだという話も聞きまして。いい情報です。
事務局	確定ではありませんが、そういう見込みです。
丸山座長	一番大きいのは 3 つ脚で、2 のほうは 4 つ脚と。4 ページの右上の絵図から、これでいいのではないかと思います。このあたりは、いかがですか。大きいのは 3 つ脚で、雪見燈籠-2 は 4 つ脚ということで。
仲副座長	今の雪見燈籠-2 は、5 ページの、中台から上は左側を使って、脚は写真 2 - 6 を使うということですね。ちょうどサイズは、これで合うのですね。
事務局	合うということです。
仲副座長	宝珠が、写真 2 のほうが変わっています。
事務局	宝珠は作り替えます。
仲副座長	宝珠は作り替える。
丸山座長	古材と新材を混ぜるのも、どうですか。上手くいくのか、どうか。
仲副座長	上手くいけばいいのではないですか。
丸山座長	このへんは現物がでてこないと、わかりにくい部分もあります。
仲副座長	そうですね。写真 2 - 6 の笠は六角形ですか。写真 2 - 6 は使わない。写真 2 - 5 を使うのですね。
丸山座長	一度組み合わせて、組んでもらわないとわからないところがあります。 　古材と新材をミックスすることが、ここでは大きな話です。宝珠が、

	違います。
仲副座長	そうですね。
丸山座長	一応、進めていただいていいです。予算があるときに、お金がかかるものは買っていただきたいと思います。また詳細がでてくれば、報告をお願いしたいと思います。
高橋構成員	脚の本数の問題で、前回私は4本派で意見したところでした。4ページの図2‐11に、今回の図2‐8が似ているという考えで、4本と判断したということですか。
事務局	そうです。
高橋構成員	図2‐13や図2‐14を見て、4本という解釈になるのかと思ったのですか。3本との違いがわからないです。
事務局	図2‐14と図2‐8は同じものです。
高橋構成員	同じものですか。図2‐13は、3本の解釈になりますか。
事務局	図2‐13は、脚3本と書いてあるのは、絵図上の脚の本数を書いているだけです。図のキャプションは3本描いてあるというだけの意味で、脚が3本ではなく、4本であると考えています。図2‐13は、図2‐11が4本のようなもので、同じ形が右側にあると考えています。
高橋構成員	図2‐13、14、11は4本だという解釈ですか。
事務局	4本という解釈でいます。
高橋構成員	わかりました。
事務局	こちらのキャプションは、絵図上の本数という意味です
高橋構成員	絵図上のということですね。
事務局)	わかりにくくて、すいません。
高橋構成員	3本であれば図2‐12みたいに、中央に脚が描かれるだろうということですね。わかりました。
丸山座長	将来、記録が残りますので、3本であるところが4本であれば、4本と書いてもらったほうがいいと思います。図2‐12は、明らかに3本。今言われたところですが、他のところは見えないけれども4本あるということであれば、4本と書いてもらったほうがいいです。 新旧組み合わせるということで、これはまた購入時に検討していかなければいけないと思います。

	他の石造品についてはいかがでしょうか。 立ち蹲は30ｃｍのゆとりがあるか、高くもできるということですね。図2－21です。
事務局	立ち手水は、そうです。
丸山座長	今日、現地でかき割りを見せてもらいました。あの状況だと、7ページの右側の燈籠ということです。ただし火袋は長方形だから、これを修正してください。上の笠の部分が、少しむくりがあるような、図2－24の形態に近いものにするということですね。
事務局	城内の燈籠を、写真に撮って図示化ものがありますので、補足でご説明します。 猿面茶席で3つ、現実には違いますが、タイプの近い燈籠があります。火袋と笠の関係が、このようになっています。260角の火袋に、150の笠が乗っています。280の横辺に対して250の立ち上がりを火袋に200の笠が乗っています。250の火袋に150の笠が乗っています。こういったものが、3つあります。火袋のほうが、今度の場合大きくて、火袋に対して笠が0.7から0.8くらいの比率になると考えます。今回、古写真の、白黒で写真が不鮮明なので、中台も含めたかたちが360で、写真解析での寸法になります。360から笠の、写真上での比率からだすと280程度ではないかということです。360の火袋と中台で、60程度の中台だとすると300程度ではないかということで、今回図面を書いています。現場でも、いろいろご意見があったように、火袋が少し細長いということでした。
仲副座長	これは今縦だけですが、写真解析だと幅はどのくらいですか。
事務局	270から280程度ではないかと思います。
仲副座長	270か、280。
事務局	今は書いてあるのは、280です。
仲副座長	280。
事務局	解析も、この写真を解析しているので、その数字をすべて鵜呑みにして、あくまでこの数字を現場でモデル化すると、やはりちょっと違和感があります。こういう類例に合わせたサイズ感を火袋に合わせて、笠の比率についても類例の比率で、修正する方向です。現場視察を終えて、そういう方針で考えています。
仲副座長	その織部燈籠に合わせてですか。まん中の260ですか。
事務局	250の280ということですけれども。ほとんど正方形であるとすれば、織部燈籠に合わせて、280の横に合わせて火袋の縦の長さも280とする

	のが、すっきりするのではないかと思います。
丸山座長	いろいろ出してもらっていますが、現場で、図2－25の火袋の縦長を修正してもらって、笠はむくりに修正してもらうことで、考えてもらったらいいかと思います。これは、いずれも小さいですね。この画面にでているのは。
事務局	そうですね。高さ的には、修正しているものと、近いです
丸山座長	一番お金がかかるものは、燈籠ですが、燈籠はこれ以外にも買えますか。今回、予算化されるエリアの中で他の石造品は、標柱もありますが、他はないですか。
事務局	あります。
丸山座長	そうすると、もう少し、そのあたりを検討してもらったらどうですか。
事務局	そうですね。お財布と相談しながら、行けるところまでは行きたいと思っています。次回の部会以降で、燈籠についても古材を調べ、形を検証したうえでご報告し、最終的には全体整備検討会議にかけて現状変更許可をとって、来年度中の整備に間に合わせたいという思いでいます。 今回、最初に説明が少し漏れていましたが、本日の部会でご了解された部分については、できれば全体整備検討会議に上げて、先行して現状変更許可をとり、後追いで灯籠や宿題となっているところは部会に上げて、全体整備検討会議に上げて、現状変更の許可をとっていきたいと思っています。 余芳の東側と北側の春日燈籠、それ以外の雪見燈籠あります。
丸山座長	余芳を中心に先にやっていくので、できれば予算のある間に石造物関係を購入してもらえるのであれば、そういう方向にもっていっていただければいいと思います。 飛石がたくさんあります。先ほど現場で、ここから、北側、来年度中に整備するとうことです。飛石などの話はあまりでていなくて、延段など飛石は何個くらいあるのか、絵図では数えられないですが、計画されている平面図の中で、そういうものも数えられていますか。まだそこまではいっていないですか。
事務局	数えています。
丸山座長	そうすると、どういう大きさのもので、どこの石かなどは、わかりますか。
事務局	飛石については、昨年度の部会のときに承認されています。数までは、まだでしたけれども、現状変更許可をとっています。野村先生に立ち会っていただいた名古屋城内では50くらいしかなく、実際には、50のうちの8割くらいになってしまうと思います。残りは購入で計画していま

	す。
丸山座長	購入するとして、燈籠もあり、飛石が結構多く、延段などもカウントしてもらって、どのくらいになるのか確認をお願いします。 今のところは、標柱までです。また戻ってもらってもいいので、枝折戸からお願いします。
事務局	枝折戸と袖垣は、先ほどご説明しました。
丸山座長	もういいですか。枝折戸は、現場でも言いましたが、藩籬譜など、ここの絵図だけでなくてそういうものも参考にしてください。全域をできるわけではないので、今回の余芳まわりのものはどうするのか。袖垣もそうですが、どういう材料なのか、現場でも言いましたが、ハギなのか、あるいはクロモジ、クロモジはなかなかないそうで、中国か台湾からきているそうです。材料やデザインも検討してください。 現場でも言いましたが、袖垣などを地中に、10ページだと埋めています。そうではなくて、衝立のやり方もあり、移動できる袖垣もあります。そちらのほうが、楽かなと思っています。そういうのも検討してもらいたいと思います。 景石配置はありますが、ここの造成についてはあまり書かれていないし、トン土のうもあります。
事務局	造成も、36回の部会でご了解いただき、全体整備検討会議にも上げています。 造成と飛石と延段などは、ご了解いただいています。
丸山座長	購入土のほうが多いのですか。どうなんでしょうか。
事務局	今回、どちらかというと残土が増えています。
丸山座長	残土を処理する。
事務局	そうです。
丸山座長	そうすると、プラマイゼロ。残土がでるのですか。
事務局	残土がでるので、最終的には、丸山先生のご助言にもありましたが、処分ではなくて全体的に薄くならして、なるべくお金を使わない方針です。 残土は、どうしても残ってしまいます。余芳の仮設小屋が今年度中に撤去するので、余芳の仮設小屋のあとのところに仮置きをしようと思っています。余芳の東側の盛土を行ったときに、それを使います。
仲副座長	仮設小屋のところですか。
事務局	仮設小屋のところが、ちょうど上がなくなります。幸いにも下が、仮設小屋を建てるためにコンクリートが打ってあり、下と区別して上に土

	を置けます。来年度以降に、東側の盛土でそれを使います。 　残土は、丸山先生が言われるように処分をすると非常に高いです。
丸山座長	できれば、全域に薄くのばしてもらったら、全部なくなります。ここではないけれども、もし残土があれば、築山の西のほうも土が流れているので、止めないとだめです。土を補充しないといけないです。それも考えてほしいです。残土を処分するのにお金がかかるから。
事務局	維持補修的な使い方も含めてということですね。
丸山座長	それで全部なくなると思います。あそこは直さないといけないです。 　それと園路自体が、かなり土が流れていて、今もお客さん、歩きにくいです。あのあたりに残土を上手く処理できるように計画をしないといけないですね。なくなっていて、30ｃｍくらいの石があって、そこにどんと落ちているから、ああいうのも考えないといけないと思います。
仲副座長	それは図面を書いて、現状変更の申請が必要です。
丸山座長	そうですね。現状変更で、こういう図面があればね。例えば、ここは少し外れていますが、かなり掘り込んでいる。そこは活用というか、園路自体が非常に優しくないというか。今の話は、今日の話とは少し違います。 　今日これをいただいて、ここの延段から上のほうで、もう一度どこのエリアを来年度行うのか、図がほしいです。
仲副座長	来年度の施工範囲ということですね。
（スクリーンで図示）	
仲副座長	築山の園路のところもやるのですか。
事務局	過去にやったところすべて、園路をつなげるつもりです。
仲副座長	土のうのところも埋めることになりますか。
事務局	埋めます。右側の上のほうは全部です。木橋の施工に支障のあるところだけはやらないです。あと南側は風信と関係してくるのでやらないです。
丸山座長	中島と半島は、やるのですか。
事務局	できたらやりたいです。
丸山座長	やる。
事務局	当然護岸は、全部やります。
丸山座長	全部やる。

仲副座長	池底の土のうが詰めてあるところも埋めますか。
事務局	そこは、今のところはやらないです。
仲副座長	橋からこっちですね。
丸山座長	これは別途また、図面に描いたものを見せてください。今範囲を書いて（スクリーン上で）もらいましたが、そこを造成します。そうするとかなり、飛石を敷くにあたって、造成したところだと軟弱です。そのあたりが気になっています。 それと築山です。小さい築山を余芳の前に、あれを早くやってもらいたいです。
仲副座長	基本的には、この等高線が設計だから、そこに合わせていくということですよね。
高橋構成員	今回、高低は、資料に特に上がっていなかったでしたか。
事務局	今回は、資料としてはお出ししていないです。
丸山座長	植栽は現場で言いました。繰り返しになるのでいいと思います。防根シートのことと、土壌改良のことです。1 本、1 本に防根シートをするのではなくて、エリアごとに植えられているところに防根シートをお願いしたいと思います。木を植えるとしたらです。樹木も全体会議に出すのですか。
事務局	出したいです。
丸山座長	キササゲなどはたいしたことないですが、一番お金がかかると思うのは、半島と島のマツです。マツは大きなものを植えるのではなくて、かなり手入れがされている、すでに 1 本でも見られるマツを、小さい小マツを、小マツといっても高いです。30 万くらいかかります。そういうこちら側の修景に耐えられるマツを植えて。ここは何マツにするのか。クロマツにするのか、アカマツにするのか、考えないといけないです。 西のほうの島は、クロマツですか。島に植えてあるのは、クロマツですよね。
事務局	名古屋あまり、アカマツがないわけではないですが、上手く育たないですね。
丸山座長	そうすると、仕立てあがったクロマツを植えて、ここは重要なので大きくはせずに島の中で、マツをやる。 今、余芳の西側にはマツはないですが、絵図にないということですか。石組みの中に、ヒノキ、サカキ、アセビ、アセビは小さいですね。 ないですか。
事務局	ないです。

丸山座長	ないのですね。不思議ですね。なければ仕方がないです。無理に植える必要はないですから。 ここの造成ができて、石組ができた中で、高木といったらヒノキぐらいしかないのか。
仲副座長	スギもあります。
丸山座長	どこにありますか。
事務局	まん中の少し上くらいにあります。
丸山座長	ここではありません。
仲副座長	余芳まわりですか。
丸山座長	余芳まわりの前の、築山のところです。
仲副座長	石組の間のところは、何もないですね。絵図にも何もなかったですか。
事務局	絵図にもないです。
仲副座長	見越しのマツがなかったでしょうか。
事務局	余芳の北側にあるのは、今点線で書いてある、クスノキとソヨゴの大木です
丸山座長	クスノキはいらないです。やめておきましょう。
事務局	だから今点線にしています。一応、絵図上はありますよ、ってことです。
丸山座長	今いった高木、中島と半島は、育った小さいというか、2m以下の仕立てたマツを入れたらいいと思います。余芳まわりで大きな高木と書いてありますが、それは苗木で。中島も半島もそうですが、防根シートと土壌改良をしてもらう。高木を中心に、主木というのか、それを植えることになると思います。 今日はなかったですけれども、余芳の雨落ちのは、この前はバラスがまわりにずっとあっただけですが、どういうものをやりますか。ここは化粧のものをやらないと、余芳がみすぼらしい感じになると思っています。この辺はどうですか。19 ページにあります。
事務局	瓦です。
丸山座長	瓦は線ではやりますが、その中です。
事務局	その内側ですか。

丸山座長	瓦はせん瓦でやることは、この前決まりました。
事務局	それは今、検討中です。
丸山座長	検討中ですか。
事務局	どういった色の違いとか。
丸山座長	建築の部会のほうも意見があるかもしれないので、突き合わせをしないといけないかと思います。こちらはこういうことを考えているけれども、どうですか、という話は、調整しないといけないと思います。
事務局	ここは、今石が入っていますが、あくまで建造物のほうの考えとしては、ここは仮整備ということで庭園のほうに引き継いで、庭園のほうで化粧をという整理をしています。この上に、1 層、2 層、二之丸庭園のほうで園路に撒かれている黒の玉石みたいなものを 1 層、2 層、お化粧として上に乗せるのがいいのではないかと思っています。
丸山座長	黒のほうが無難かな。那智黒です。こちらはこちらで、そういうことを考えているのは、先方に伝えてもらったほうがいいとは思います。 木橋は、今回は関係ないです。花崗岩のあの石はどうするのか。木橋の橋脚がどういう状況で、このとおりにはならないです。
事務局	24 ページをご覧ください。木橋の構造物の断面図があります。4 つ基礎があって、それに、タタキの感じで橋脚を立てておいて、ズレ止めといいますか、根がらみのかたちで 4 本を緊結することを考えています。今、基礎伏せ図があります。今この位置に石があります。この石をどういうふうにするのかが、課題と思っています。この石がとれるのか、どうかというのがあるのですが、とれなかったとしても、この大きな景石を巻き込むかたちで、根がらみをなんとか設置することができれば、基礎のズレ止めにも有効に活用できるとイメージでは思っていますが、そのへんはまた考えていかないといけないと思っています。
丸山座長	ここは修正がいると思います。このままいかないと思います。今回ここは、やらないのでいいです。
仲副座長	護岸はやるのです。
丸山座長	護岸はやります。
仲副座長	もし、この石が護岸のところから落ちてきた石だとすると、このまま置いておくのであれば、護岸の欠けているところを何か処置をしないといけないです。
丸山座長	まだ発掘調査をしないと、このあたりがしてないです。
事務局	今のところは、今年度でケリをつけたいと思っています。

丸山座長	ここは今年度ですか。
事務局	はい、池の部分は。
丸山座長	時間がそんなにないですね。
事務局	まず土の解釈次第になっていきます。
丸山座長	はい。そしたら、だいたいそのようなところですね。庭で何か抜けているところがあれば。
事務局	洲浜の関係があります。
丸山座長	洲浜ね。あれも発掘してもらわないといけないです。図面はないですか。
仲副座長	発掘は済んでいるのですよね。
高橋構成員	洲浜の構造の図面は、現場で見た資料ですね。
仲副座長	整備の案は、前々回でたものですから。
事務局	今、この状況でまとめています。3、40ｃｍ、場所によっては 50ｃｍくらい、現地盤のところに段差が生じている状況です。 これは以前に部会で検討してもらったものですが、2 案、遺構の上に表面表示する案と、出せるところはタタキを露出展示する案があります。このときでも、イ案ではないかと言われましたが、今日現場でも、イ案が妥当ではないかということでした。ただ、タタキの礫敷がやはり近代だということで、保護層を設けて、礫敷ではなくタタキで表面表示をしていく。洲浜のところにもどりますが、レベルの差をどういうふうに解消するのか、ご意見をいただいたところです。
丸山座長	さっきの模式では、よくわからないです。縦断をとってもらって、それで覆土をどれくらいにするのか。それでさっき話したように、石との段差のところは筋芝で処理をするとかという具体的な話を書いてもらったほうがいいです。
事務局	わかりました。先ほどのご意見からは、こちらの景石の近くの、少し筋芝で少し段差を受け止める。タタキの部分に関しては、表面表示でできる限り遺構と同じくらいの勾配で、タタキは復元する。最後、例えば鋼土を盛り上げたかたちで、そこにタタキをする。
丸山座長	ただ、覆土をやりすぎると、あそこのタタキの洲浜の感じがでないです。そのへんは、どうするのかということです。かなり慎重なやり方でやらないといけないです。単純に 20ｃｍ覆土して、ざーっとやってしまった上にまたタタキが 5ｃｍとか、4ｃｍとかできるわけです。それと、池際とのとりあいが難しいので。途中までどうするのか。穴とかありま

	すが、あの穴は、埋めるのは埋めてもいいです。埋める中で、そのまわりは修復という考え方と、覆土して保護するというやり方があって、そのへんの取り合いが、どうなるのかと思います。
仲副座長	ここは、埋め戻しで保存ではなかったですか。
丸山座長	保存です。でもね、池際のところに覆土をするわけにはいかないです。水生植物が埋まっていたのではないか、という話ですから。あそこは、見せないといけないです。
仲副座長	だから、イではなくて、アのほうになるのではないですか。イではなくて、アではないですか。
事務局	アでもなく、イでもないです。
仲副座長	そこのところはイで、斜面から上がアになるのではないですか。
事務局	そうなります。今立ち上げの壁はないです。
仲副座長	それは、新しい図を作ってもらったほうがいいですね。
事務局	そうですね。アのほうが近いですね。
仲副座長	アのほうが近い。
丸山座長	これは模式的だから、本来の長さの中で、どういう作業が可能なのかは、スタディしてもらったほうがいいです。
仲副座長	2段目がさっきのところをどうするのか。
丸山座長	覆土をして遺構を守るやり方と、現況でているところを修復するという両方やり方があります。立ち上がったタタキは修復です。覆土をするわけではないので、その微妙なところにあります。ここは一番の見せ場でもあるから、タタキの州浜を表現できているのか、どうかです。取り付きが上までやって、段がついて、タタキがこうなったらおかしいです。今タタキがあるところに擦り合わせてこないといけないと思います。
仲副座長	2段目の立ち上がりのところで、上手に段差をとる。
丸山座長	池の話があるから、高さが決まっているので、立ち上がりができないと思います。
仲副座長	1段目はそのままでしょう。
事務局	この立ち上がりですよね。
仲副座長	そう、そこをちょっと。

事務局	どこまでをどうするのか、ということですよね。
丸山座長	そんなに立ち上がったら困ります。
仲副座長	そう、あんなに立ち上がったら、困ります。
高橋構成員	できるだけ立ち上がりを少なくした場合、どういうデザインになるのかを検討してほしいです。 この平面図だと、計画の飛石の位置が遺構の穴とずれている状態で書かれているとようで、遺構の穴に合わせていく設計でいけるのか、伺いたいです。
仲副座長	違うみたいですよね。小石のほうが、陸軍のときではないかということですね。
丸山座長	あれは、かなり深いでしょう。
事務局	穴ですか。
丸山座長	はい、穴です。
事務局	今の発掘調査で、下まで断ち割っています。飛石が入っていたところは、そんなに深くはないです。
仲副座長	あそこに飛石が入っていたのですか。
高橋構成員	可能性はあります。
事務局	可能性はあります。
丸山座長	あそこに飛石を置くのかどうか。
高橋構成員	ちょっと穴の深さが深いのが気になります。
平澤オブザーバー	でも、あそこの詰まっていたところは穴みたいなものでしょう。
事務局	今は穴で、もともとはそこに飛石があったかもしれないです。タタキの中に埋まっているかたちで使われていたかもしれない。それを再現するのか、どうかというのがあります。発掘調査では、2 つ分くらいは見つけています。それより先は、見つけていないというか。
高橋構成員	礫を外せないので、ということですね。
事務局	そうです。そこまでやるのか、どうかです。
仲副座長	2 石に合わせて延長が、自然に繋がるかたちでやるしかないのかな。

事務局	そうですね。表面表示をするのであれば、飛石も発掘調査の遺構の成果なので、飛石を据えたところにタタキを巻き込むのが自然と思います。
事務局	礫敷のところを断ち割るかたちでどこまでやるのか。
仲副座長	断ち割るのですか。
高橋構成員	前回、手前のほうをいくつか断ち割って、飛石の据え付け穴だと確認できれば、現状見えている穴は合わせて、礫敷が被っているところは推定するということだったと思いますが。現状の断ち割った穴が、ちょっと深かったので、そう見ていいのかというところだけ。
事務局	現状のものは、飛石の穴ではないかと思います。
高橋構成員	と、解釈すべきものということすね。
仲副座長	今の人は飛石ペラペラを使いますが、当時は玉石（自然石）を使いますので深いと思います。しかも斜面のところだから、ずんとしたものを選んでいるかもしれない。
高橋構成員	そうかもしれないですね。ずれないように大きい石を使用しているかもしれないです。
丸山座長	あの穴はそう処理しないと、どうするのかという話になります。そうするとも少し上のほうも断ち割って。
仲副座長	調べますか。
事務局	それをやると多分、玉石の近代遺構が、ほとんど現況がなくなってしまうので、基本的にこれはこれで残して、この穴の解釈をもう少し整理したうえで、飛石であれば表面表示のときに飛石を据える。そこに合うように園路を少しすり合わせていく方針で考えています。
仲副座長	さっきの俗称、鯨石を動かさないから、絵のとおりにはなかなかいかないです。
事務局	言われるとおりです。極力寄せていきますが、ここは遺構がすべてですので、そこはフィックスした状態で合わせていこうと思います。
高橋構成員	なかなかこのような飛石の据え付け痕跡は、今まで確認できている例は少ないのではないかと思います。結構おもしろいと思います。建物などの礎石の据え付け痕跡とは違う形ででてきたということがが成果と思います。
仲副座長	掘り穴が大きいです。深いし。
丸山座長	一度検討してもらって、どういう修復の仕方がいいのか。

事務局	これはこれでタタキの中に飛石があったというのは、
丸山座長	絵図にはあるから。
平澤オブザーバー	さっきの池側の断ち割りは相当深かったです。それから考えると、飛石の据え穴と考えるのはおかしいです どういう用事であの穴を、
事務局	その説明が漏れていました。 手前の水が溜まっていたかもというところは、もともと下にタタキがあります。そこまで意図的に掘った施工をしていたのは確実です。その上の半分に断ち割ったところは、手前のところと同じ構造なのかどうかを確認するために、わざと深く掘っています。タタキ自体は、多分上から10ｃｍくらいで途切れています。下の水が溜まっていたのではないかというところとは、構造が全然違います。
平澤オブザーバー	断ち割り面の土層はどうなっているのですか。左側を掘ったのでしょう。
事務局	左側を掘りました。
平澤オブザーバー	掘って、そのこっち側は。
事務局）	右側の断面の部分ですよね。
平澤オブザーバー	断面の土層はどのような感じになるのですか。
高橋構成員	断面は、抜き取りの土が入っている状態で、据え付け穴の埋土は見えていない様子でした。
平澤オブザーバー	私が言っているのは、現場で断ち割った穴は、結構深く掘ったんでしょう。
事務局	はい。
平澤オブザーバー	それが穴だと考えると、そのように深い穴を飛石の据え付けには掘らないわけだから、もしそういう穴だったら、別のことを考えないといけないのではないのかということです。 今聞いているのは、例えばあれが飛石の据え穴だとしたら、飛石を据えている穴が掘っている断面よりも、かなり上のほうで断面に見えるのではないか、ということです。
事務局	当初の段階で、もっと浅いところで一旦止めて、さらにその下にタタキの施工があるのかどうかを確認して、深く掘っています。浅いところで土層が変わっているはずで、それが飛石の据え付けの穴の可能性もあります。そのあたりはわかっていないです

平澤オブザーバー	断面が仔細にわかっていないということですね。
事務局	そうです。推定でお話しています。
平澤オブザーバー	飛石の据え穴だったというからには、そういう調査成果がないと言えないです。そうではなくて、タタキのところにあいている穴だけがあるのか。下は全然地盤なのか。という判断で、そのようなに飛石かどうかにこだわるのは、どうなのかって思います。
事務局)	その結果、はっきりわからないようであれば、あえてやらないほうがいいかもということもあるかもしれない。
平澤オブザーバー	そのほうがいいと思います。
事務局	そのあたりは、もう一度調査成果を精査したいと思います。
平澤オブザーバー	それが合理的に説明できるうえ、しかもそこに飛石があったほうが、庭の構成としてよければ表現したほうがいいです。何か正体がわからないものを、遺構がこうなっているからという感じで、漠然と表現するのは反対です。
事務局	これが現状の飛石の予定図です。水槽があった場所が、このあたりです。そのすぐ北なので、ほぼほぼ飛石を計画しているあたりを、ほんの少し今の。
平澤オブザーバー	池側に？
事務局	はい、穴に合わせるという、誤差程度のずれです。自然に解釈すれば、
平澤オブザーバー	その飛石の痕跡が、あそこに現れているから
事務局	そこはしっかり学術的にも検証したうえで、根拠が整理できれば、この飛石の計画を少しずらすことを考えています。
平澤オブザーバー	そうですね。
事務局	今の水槽というか、その上の部分はどうやって整備するのかは、これからの議論だと思いますが。そこの水槽の部分は、ほぼ露出か、今の土を取って見せるという方針が、ほぼ決まるのであれば、今回の調査で一部だけ断ち割っていますが、逆側も断ち割って、そっち側が本当にタタキがあるのかどうか。調査の中で必要な記録をとっておきたいと思っています。立会いの中でとるのではなくて。と思いますが、その方針がそうであれば、今回の調査でそこまでいきたいと思っていますが、それでよろしいですか。
丸山座長	ほかのところも、水生植物が生えていただろうというところもあけてもらいました。形は三角形、壁がかなり丸く、だからここは開けてもら

	ったらいいと思います。ここの庭の特徴として、水生植物は最終的には導入する。鉢で植えていけば十分耐えられるし、直接植えるのは無理です。そういう方針で、全域あけてもらったらどうかと思います。
事務局	こちらの部会でも、そういう方針があるのであれば、調査で行いたいと思います。
丸山座長	ここに、例えば水生植物が埋まっていたら、ものすごくおもしろいです。ここの庭の特色は、ほかのところにはないものですから。当初は長細い石が、あそこに据えられていたのではないかと思っていましたが、ではなくて。やっぱり掘ってもらってよかったです。
仲副座長	石を詰めたのは、軍の時ですか。
事務局	そうですね。可能性が高いです。
仲副座長	飛石があって、石を外したことも考えられなくはないですよね。
高橋構成員	長手の石の据え付け痕跡と最初は思いましたが、とても深いのと、下まで一体でタタキがまわっているので、そうではないと思います。
事務局	タタキがあることに、合理的な理由が。上が飛石で、タタキがわずかまでしか入っていないという、仮にそうだとすると、明らかに同じ石が入っていたとしても、構造が違う別のものかなということを、今現場で話しています。
丸山座長	あちこちに水生植物を植える装置があるので、ここもその一つです。
仲副座長	なぜ絵図に描いていないのかなっていう。
高橋構成員	そうですね、絵図にも描かれていてほしいところですね。
丸山座長	絵図には描いてほしいですね。描いていないのは、橋も6脚描いてあるが、実際は4脚です。これは、発掘と絵図とを見ながら、どれが一番真実に近いのだろうという話はやっていかざるを得ないです。発掘はされているのだから。
高橋構成員	その水生植物だって断定するには、そこに泥土層みたいなものがあってほしい。
丸山座長	有機物は、ほっておいたら分解してなくなります。
高橋構成員	なくなりますか。
丸山座長	水に浸かっていたら、残ります。浸かっていなかったら、全部分解します。ほかのところでも。

高橋構成員	謎の穴という説明になるかもしれないですね。
事務局	この発掘で、すべて今入っている玉石状のものは取りますか。 すべてかはわからないですが、少なくとも逆側などはもう少し。逆側のところは黒い層が溜まっているとか、同じタタキではなかったりなど、そもそも違うかもしれないということもあります。少し調査は追加で行いたいと思っています。 先ほどの断面図を作るにも、こういう断面図があったほうがいいのかと思いました。そこに合わせたかたちで調査も行っていったほうがいのかと思っています。
仲副座長	半裁でいきますか。
事務局	そうですね。全部は掘るつもりはなくて、逆側も。いずれにしても不明なところが少しあるので、追加すれば、もう少しわかるのかと思っています。 最終の表示をどうするのかという姿を踏まえて発掘調査をできるといいかと。両端部を断ち割って真ん中だけ残った場合にどうするかというところがあるのかと思っています。
仲副座長	水槽ではないとなった時に、全部掘り上げてしまったのでは困る。
高橋構成員	掘り上げないと確かにはわからないから、記録保存のかたちで、この想定で掘るということではないですか。
事務局	そうです。タタキがある状態は、その状態で見せるかどうか。 東側を断ち割って掘るのであれば、全面ここは掘って見せるのも一考かと思っています。それを発掘調査で行ったほうが、学術的な調査でもあるし、採用的にも非常に丁寧になって。そちらのほうがいいと思っています。工事として掘る、丁寧に行うのですけれども、それはどうかと思っています。
仲副座長	全域と言われるのは？
事務局	水槽と想定している部分です。
高橋構成員	水槽の中を確実に調査するということですね。
事務局	最終のイメージがなく、あっちもこっちも断ち割るのは、どうかと思います。それをまた戻すのであれば、戻すのもあるのですけれども。
高橋構成員	穴をあけた状態にした時に、それが維持できるのか、ということを想定する必要があります。維持できなくて結局蓋をするみたいなことにならないように。

丸山座長	これを維持しもらいます。ここのところ堤体はし合うけれど、三角のところから。ここの庭の特色は、そういうところに水生植物を植えている。ただし、植えたのか、例えば鉢のようなものを入れてやる。
仲副座長	もう一重あったからね。
丸山座長	そういうこともあるから、ここを埋め戻すのではなくて、逆に見せたほうがいいと思います。 水が溜まったときに、ちょうど端が欠けているのは、上から流れた水を溜めて、溜まりすぎたら流す、という工夫も見ておいてほしいです。
高橋構成員	ここは最終仕上げとしては、掘り上げる可能性が大と考えて、学術調査で四角いところの埋土は掘り上げるということですね。
事務局	段階的に、こちらをまず掘って、そっちまでタタキが続いているようで一連のものと考えられるようであれば、最終的に完堀まで行って、埋め戻さずに、養生、土のうを敷くか。
高橋構成員	養生ですよね。下に何か粘土層は残るのですよね。
事務局	粘土層も取ると思っています。
高橋構成員	一応養生をして整備するということですね。
平澤オブザーバー	こっち側に、今字が小さいです。これ取るのかどうか。
丸山座長	ここも州浜と書いていた砂利は、取ってもいい気がします。それは残したいと言われているから。
事務局	それはそれで、やはり遺構なので残したいです。
丸山座長	でも、煉瓦の欠片などが入っているわけでしょう。 例えば、兵舎の場合は残しました。残してほしいということで。ただ、建物の遺構ではないので、どうかという気はします。今後もう少し掘り進んでもらって、その経過を見ながら考えてもらったらどうかと思います。
平澤オブザーバー	仕事の内容が、この場所はよくわからないので、基本は保存だと思います。今、解釈しきれないところを、無理やり解釈してもすっきりとはいかないと思います。将来に向けて、ここは保存しておくのが、基本的な取り扱いだと思います、
丸山座長	それでは、発掘の成果を期待しています。
事務局	平澤調査官、今のお話は水槽の部分も含めてですか。
平澤オブザーバー	水槽の部分は水槽だと、池岸のほかのものと合わせて考えることはできるので、掘ってもいいと思います。そしたら、他の池岸の水槽の取り

	扱いと同じように。何か植えるのですか。
丸山座長	植えるのではなくて、鉢です。水際だから鉢に、何でもいいですが、花菖蒲なら、植えてそれを置く。直接植えたら大変だから、泥が溜まって、それは可能です。
平澤オブザーバー	水生植物の鉢として使うということですね。
丸山座長	鉢を入れることによって、そこは維持できる。
平澤オブザーバー	それは庭の情景としても十分あります。ここの造形からしても、問題ないと思います。ただ、うえのものは何だかよくわからないので、遺構は残して、かぶせて、その上に必要な整備をしていく。
丸山座長	今日は、現場を先に見たので、議論がいろいろあっておもしろかったです。それでは、事務局へお返しします。
事務局	今回の部会でのご審議を、再度に整理をしたいです。全体整備検討会議に上げていくものとしては、石橋、3 ページの燈籠。6 も。7 ページの火袋の形を少し直して、笠を少し調整したものに対しては、委員の皆様方に修正したものでメールをお送りし、ご了解いただけたら次の全体整備検討会議に修正した図面を上げたいと思います。8 ページの標柱は上げたいと思います。枝折戸と袖垣については、継続議題になりましたので、こちらは次回になります。次も再度部会で上げさせていただきます。19 ページの雨落ちの瓦になります。1 ページから 8 ページまでと 19 ページについては、全体整備検討会議で報告したいと思います。
丸山座長	予算がついたら、大きいほうの雪見燈籠が買えたら、だいぶ違いますね。
事務局	すいません、樹木も将来像ということで、最終的にはこういう姿を目指したいです。それに向けて、当初植える木については、もう少し低いものを植える方向で、全体整備検討会議へ上げさせてもらいます。
丸山座長	それはいいです。特に、マツのところは島と半島にあるから、そのクロマツは仕立てられて、これくらいの小さいものでいいです、それは植えたらいいと思います。
事務局	そのあたりを文章化します。
平澤オブザーバー	全体的な方針を了解された、ということで、それに基づいて今後具体的な工程、来年度の実施計画については、どうやっていくか。
事務局	現場であったり、庭園部会で検討します。
丸山座長	将来、高木になるものに対して今回は、ということで。低木のことをごちゃごちゃやりだしたら大変です。

事務局	それでは、最後になりますが、本日予定していた内容は以上になります。本日も、長い間現場視察を含め貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。来年度以降の整備に向けて、名古屋総合事務所全体、力を合わせて進めていきたいと思いますので、引き続きご指導をいただきたいと思います。それでは以上をもちまして、本日の庭園部会を終了します。ありがとうございました。